

えたいの知れぬ

日名子 太郎

この世の中には、えたいの知れない人もいるし、えたいの知れない事もいろいろある。よくわかるとなんだつまらないという事でも、正体のわからぬ間は、つまりえたいの知れない間は、不気味で、こわいものである。また逆に、本性がわかると、もつとこわくなる場合もあり、世の中、仲々に複雑である。

先日、ある出版関係の一青年と話をしていた、話題が最近の子どもの人口激減のことになった。

「君のところ、もう子どももいるの？」

「いえ、まだなんです」

「いつ結婚したんだっけ？」

「えー、もう七、八年になりますか」

「それじゃあ、そろそろ一人ぐらいいは……」

といったやりとりがあつて、要するに彼の考えをつきつめていくと、将来の社会には、あまりいいことも無さそうだし、子どもを生んでも、その子がかわいそうということのようである。この青年のような、こんな先行きへの不安を抱いて生きているものは少なくないし、そこまではコンピュータもわからなかつたらしい。

現代の社会は、何でも科学的予想が可能のように錯覚をおこし、科学的に明らかにしていこうとする傾向の強い反面で、たたりとか、古い・迷信めいたことがそれ以上に流行している。戦後「ひのえうま」の年の出生児数が最低といつた出来事のある文化国家は珍らしい。もつとも、推計学などは、じき出した予想人口数通りに実際人口が増減すれば、ことは簡単だが、そううまくはいかないから、面白いのに、それが不安になるのが現代の日本人らしい。

子どもを生んで、みんな保育所や幼稚園に入れておけば、みんな幸福になるだろうと普通の人は考えるらしい、ところがそうでない人もいる。「幼稚園制は、軟弱な好事家や、みだりに分に安んずる平俗人やを産出するのに、もつとも効能のある手段の一つである*」といった具合である。

*エレン・ケイ「児童の世紀」の一節

あるものを正しいとすることに對して、必らずその逆を正しいとするものが存在する。ユークリッド幾何学があれば非ユークリッド幾何学あり、発達中心の心理学に對して、反発達の発達心理学もある。自由保育あれば、強制保育もあるのがこの世の中である。

いまは、誰しも少なく生んで、うまく育てたいという。そうすれば、生活が楽で、皆、幸福になれると思ふらしい。ところが、その親たちは、將來、自分らが年老いて老人になった時、子どもを生まなかつたことで、青壮年層の人口が稀薄で、沢山な老人の福祉まで負担することは不可能で、老人は死ぬまで自分たちの為に老体にムチ打つても働らきつづけねばならないという第二のえたいの知れない不安を作り出していることに気がかない。

「有名無実」ということばがあるが、次から次へといろいろな本に名を連ね得意になって、これでわが一生安泰とほくそ笑んでいる「有名無実人」は気の毒なものだ。世阿弥元清いわく「公案して思ふべし。我が位のほどをよくよく心得ぬれ

ば、それほどの花は一期失せず。位より上の上手と思へば、本ありつる位の花も失するなり。よくよく心得べし」(「風姿花伝」第一年来稽古条々)まあまあ人間、ほどほどに生きてこそ花咲くし、えたいの知れないものに不安を抱くようなこともおこらない。

今から十年ほど前に次のような駄文を書いた。(日名子太郎「保育の四季」の一節より)

「いつまでも 　いつまでも

　詩人の消え去つたのちも

　歌は街を流れつゞける

　人は作者の名も知らない。^{**}

* * * シヤルル・トレネ作詞・曲

保育者は、この詩人のようなもの。子どもたちは育つてやがておとなになり、保育者の名前などは忘れて了います。それでも歌は街を流れ生きつゞけます。私たち保育者は、いつまでも流れるような魅力あふれる歌を綴らねばなりません」と。

「無名有実」に生きてこそ、えたいの知れないものは雲散霧消するものである。(玉川大学)